

ランプの宿創立15周年記念

里山文化・感謝祭、開催のごあいさつ

本日は、お忙しいなか、この里山によろこおいでくださいました。

今年はその猛暑のせいでしょうか、いつもの秋が秋らしくなく、果物の実りもパツとせず、冬がもうその辺で待ち構えているような感じです。

毎年、里山文化・感謝祭をこの時期開催してまいりましたが、今年が創立15周年の記念すべき節目の年を迎えました。

初春の3月には、やはり、ふるさと紀行の30周年記念祭を開催し、今年は何んと思ひ出に残る年だろう、としみじみ感じております。

15年と、一口に言ってしまうれば簡単ですが、振り返ってみますと、山あり谷あり、紆余曲折、試行錯誤の連続の歳月でした。

私個人の関わりとしては、平成7年7月2日（この日の印象は忘れることはできません）、当時まだ東京で出版印刷会社の社長として、バリバリ働いておられた佐伯編集長から、「いい山が見つかりそうだよ、車を出してもらえないかねえ」と、連絡が入り、この山林のオーナーで、佐伯編集長の母校である、鴻城高等学校の小田理事長さんに案内されて、桂谷集落到ち初めて入ったのです。

私と佐伯編集長とは、詩人仲間として交流する中、佐伯編集長が50歳の時創刊された「ふるさと紀行」の、第一定期購読者が私という奇縁もあって、里山再生活動にも夢を共有するようになって行きました。

ですから、何と言っても、里山再生活動の原点は、「ふるさと紀行」であり、全国の執筆者・愛読者にまず、活動の趣旨を伝え、資金カンパ、ボランティア動員を呼び掛けたのでした。何と言っても、資金、労力が必要でしたから、そのころは若さも手伝って、恐れも知らず、奔走しておりました。

さすがに、仕事とボランティアの両立成しがたく、無理がたたって、病気で倒れ（リュウマチの薬害であと4時間おそかったら、あの世行き）というハプニングもありましたが、「ここで夢をあきらめたら、なんのことはない」との思いで頑張ってきました。というよりか、この里山に私のふるさとの匂いを感じていたので、この里山がいつも私の中心にデンと居座っていたようです。

そして、6年前、ついに会社を希望退職し、住居も宇部から小郡に引っ越したのです。まだ、年金の貰えない56歳でしたから、やはり、一抹の不安はありました。でも、これで、思う存分活動できる、という喜びの方が大きかったので、夢が膨らんでいき、ここまで成長できたのです。

佐伯編集長はといえば、東京生活に終止符を打ち、一足早く小郡住民になられ、足を里山の大地につけての本格的な活動をされていました。

とにかく、多くの人たちに、自然の良さを知ってもらいたい、一緒になって活動をしてもらいたい、特に子どもたちには、自然の中で思いっきり遊びたい、と、童の森にアスレチックを作ったりしました。

佐伯編集長がいつも口癖のように言っている、昭和30年代の、物には恵まれず貧しかったけれど、決して不幸ではなかったあの時代を、この里山で再現したい、という思いが大変強く、それが、今日の発展の礎となっているのです。ほんとうに、たくさんのかたがたに、資金や作業の無理も言いながら、それに応えてくださいましたことにいま、どれだけ感謝していることでしょうか。決して、御恩は忘れません。その、恩返しとして出来ることと言えば、まず、心身ともに元気でいて、里山を訪れ来る人々に「ここへ来たら、元気が出た、楽しい気分になった、また、明日から頑張られそう」と、思ってもらえるような里山作りを、これからもしていきたい、ということです。

まだ、まだ、し残した夢がいっぱいあります。人は、夢を追い続けるかぎり、いくら歳を取っても、老いません。佐伯編集長、81歳にして、5、60代にしか見えないとよく言われて、「そうか！まだまだ、やるぞー」と、息巻いています。ミスター・ドボックというあだ名のとおり、朝から晩まで重い石を運んでは、子どもたちへのこれからの夢のプレゼントとして、「児童文庫・おもちゃ館」の基礎づくりに頑張っています。

今年は、今までの15年間の活動が国にも認められて、内閣府より「生涯現役社会作りに貢献した」として、ランプの宿が表彰される名誉にも浴しました。小田理事長さんや、小田清さん、平山先生、どなたも80歳前後でありながら、若い物にはひけをとらんと、とばかり生き生きとやっておられる姿に、私たち若輩者は、ため息まじりで、「ふーっ、すごいなあ、ついていけないわあ」などと、多少あきれながらも、尊敬の念を抱かずにはおれません。自分が80歳になる頃を、想像してみるだけで、また、ため息ですから。でも、なんと、すばらしい元気はつらつもの、人生の大先輩が身近にいてくださっていることでしょうか。それだけでも、うれしいことですね。ありがたいことですね。

今日、お出でになったみなさんも、まだまだ夢がいっぱいおありでしょう。里山再生は、人の再生でもあります。みなさんの隠れた才能や、趣味や、特技を、再発見し、共に磨き合い、刺激し合い、伸び合っていく場所なんです。

写真、絵、書、手芸、木彫り、布ぞうり作品などの展示をしているのも、そのためです。みんな、それぞれに、なにかいいものを持っているはず、どうか、惜しむことなくこの里山で大いに発揮してください。

いずれ、だれもが、生を終えねばならない宿命にある私たちですから、いま、この時を思う存分生きて、楽しもうではありませんか！

明日は、もっといい風が吹いてくる、と信じた方が幸せ、というもんです。

里山日記（81）15周年、里山文化・感謝祭

なぜにこうもこの私は、祭りがすきなのだろうか、と自問自答してみると、母のDNAを受け継いでいるからなんだ、と納得した。母は、どんなに遠くても、盆踊りに出かけていた、いや、先頭に立って踊っていた。ある晩のこと、ハーハー息せききって帰って来た。「み、水」というと、父が差し出した柄杓の水を一気に飲み干し、「キ、キツネにばかされそうになったんじゃ」と言って、私をびっくりさせた思い出がある。なんでも、お土産にもらったいならずしを狙ってでたらしい、遠い遠い、昔話のような実話である。

だから、ランプの宿が創立15周年を迎えた今年は、年初から、私の祭り好きの血が騒ぎ、11月6日、里山文化・感謝祭を開催したのだった。

ちょうど、「国際交流ひらかわ風の会」と、とてもいい交流をしていたおかげで、ペルーのケーナを吹いてくれる、「YOSHIKI-CHYA」のメンバーさんをお招きし、弥生の里で里山コンサートを開くことができた。それに、飛び入り大歓迎と言っていたので、大正琴に、フラダンスに、アフリカ太鼓と、音楽のオンパレードだった。ケーナの響きはそれはすばらしく、里山の自然に溶け込んで、観客はうっとりとし聞き惚れていた。

大正琴は、山崎さんが、これまた、びっくりするほどの腕前を披露され、おしゃれな装いにも目をうばわれた。

村岡さんのフラダンスは、優雅でエロチックで、腰の振り方には、男性諸君、悩殺されそうであった。表情も豊かで、ハワイから招いたような錯覚に陥った。

そして、長さんの、瞬間芸、頭の上にコップの水が落ちそうで、落ちない手品。でも、出演者のミスでザバーッと、私や管理人の頭にかかり、見物者は大喜び。

極め付きは、里山寸劇～今、里山に蘇る坂本龍馬伝説～、脚本・演出は、私で、急遽思いつき、龍馬には、佐伯管理人、お龍には、長さんのキャストで、大河ドラマをもじってパロディ化したもの。ハカマは詩吟をされる上田さんから借り受けた。坂本龍馬を里本良馬と変え、お龍は、紅おりょうと変えた。佐伯管理人には「日本をこの里山から元気にせんといかんぜよ！」と言わせ、私の太極拳の木刀を振り上げさせて、拍手喝采を浴びた。長さんは、おんな釣り師だから、本物の鯛を買ってきて釣り竿で釣るカッコよさ。

こんな、ばかな脚本書いて、これに文句も言わずに、ばかになりきって演技してくれたふたりに、観客は、総立ちで応援拍手して、大笑いしてくれたようである。

かくして、2時間余りの全ての舞台は終了。60人あまりが、歌ったり踊ったり、拍手したりと、盛り上がって、仕掛け人の私としては、大満足であった。

河内さんの布ぞうりのクイズもときめきの花を添え、藤田さんの折り紙もため息をつかせるに十分だった。こんなに賑わい盛り上がったのも、山上の神様に祈りが通じたのか、晴天にめぐまれて、小田先生がご挨拶で言われたように、“念ずれば、花開く”を、実感したのだった。

さらに、ポンポン菓子に協力していただいた、地元の小田清さんグループや、焼きそばを200円の格安で作ってくださった風の会さん、タイの留学生の女の子たちの手伝い、そして、いつも支えてもらってる仲間のボランティアの働きあってこそ、また、この里山を温かいおおらかさで見守ってくださってるオーナーの小田先生、すべての方々にこころから感謝申し上げたい気持ちでいっぱいである。

バーベキューハウスには、写真、絵、手芸、布ぞうり、木彫り、織物と、実に多彩な芸術作品が展示され、里山文化は花盛りを見せていたことも、15年の積み重ねの賜であろう。

中でも、上田さんの描かれた畳一枚ほどの大きさの絵、お地藏さまがにっこりと笑ってる絵と「夢があるからだいじょうぶよ」の言葉に、多くの人が立ち止まって感動していた。

「おまえは、ほんとうに、祭りバカじゃのう」と言う、母の声が天国から聞こえて来たような気がした。

まだ、まだ、81歳の佐伯管理人には壮大な夢計画があり、15周年の努力が認められて、内閣府より表彰の栄誉をこの秋賜ることから、それを記念して、子どもたち、母親たちに、「里山児童文庫」と、「子どもおもちゃの家」を作ってプレゼントするとの意気込みで、目下巨石を運んでの基礎作りに熱中。また、明日から、希望の風に吹かれて、好きなだけ夢を見て、あせらずに実現させていこう！たくさんの人たちに元気と夢を配りながら。

20周年には、里山から私の大好きな花火をうちあげるぞー！

みなさん、それまで元気で生きましようねえ。



H22. 11. 8

ランブの宿

管理人 佐伯清美

マネージャー 畑山持枝

ランプの宿の管理・お世話をしている者です。

<参考資料>

* 佐伯清美の略歴と主な活動

1929年 岩国市美和町下畑に生まれる。

13歳の時、県庁で給仕の仕事に携わり、以後、苦学しながら山口県鴻城高等学校の第一期生として卒業。その後、上京し日本大学芸術学部に入り、深作欣二（後に映画監督となる）らとともに、シナリオ作家を目指す。

24歳の時、印刷会社を設立。

30歳で結婚、2女1男誕生。

50歳の時、「ふるさと紀行」を創刊、執筆者、愛読者を求めて全国行脚。

66歳の時、小郡にて里山再生活動を開始。

70歳の時、東京より小郡に転居、本格的に里山再生活動に取り組む。

81歳の現在、心身壮健にして、各種出版、執筆、講演、土木作業など、精力的に活動している。

山口県環境推進協議会委員を務める。

KRYラジオ放送に毎週水曜日10時20分より出演し、好評を博す。

近々、国（内閣府）より、生涯現役人生を全うしているとして、表彰される。

趣味… 旅行、登山、映画、詩作

* 畑山静枝の略歴と主な活動

1948年 宇部市に生まれる。9番目の末っ子で虚弱体質であった。

宇部高等学校を卒業し、会計事務所に勤めながら結婚し、1男1女を出産。夫と喫茶店を経営するが、3年目に夫がガンで他界（34歳）

31歳の時、4歳と1歳の子どもを抱え、経理の仕事に復帰。パートを転々としながら、ウベニチ新聞社に最終就職する。47歳の時、リウマチにかかり、あらゆる治療をしながら、里山活動を始める。51歳の時、葉

害で九死に一生を得る。56歳の時、合併で希望退職し、小郡に転居。

以後、里山活動に専念しながら、好奇心の虫に翻弄されている。

山口県男女共同参画、企画運営委員（17年～21年）

山口市すこやか長寿対策審議会委員（20年～22年）

山口県県民活動推進委員（18年～）

山口県社会教育委員（22年～）

山口県子育て文化審議会委員（22年～）

健康生きがいづくりアドバイザー 太極拳正講師

ランプの宿マネージャー ふるさと紀行編集長 里山母親クラブ

趣味… 詩、エッセー、似顔絵、イラスト、映画